

# 波々伯部神社で採集した須恵器から

京都府立大学大学院文学研究科  
史学専攻博士後期課程 1回生  
野田 優人

## はじめに

京都府立大学文学部歴史学科では、2014年9月2～4日、兵庫県篠山市内でフィールド調査をおこなった。その下見調査（8月4日）の際、波々伯部神社内で須恵器を1点表採した。その後9月2～4日の本調査に際して、さらに神社内で表採資料がないか踏査をおこなったが、採集することはできなかった。

以下、下見調査の際、表採した須恵器について述べたい。

## 1 表採した須恵器

表採した須恵器は1点で、波々伯部神社敷地内で見つかった（図1、2 写真1）。器種は平底の杯である。復元口径は12.0cm、器高は3.8cm、外面調整は、体部にロクロナデ、底部にヘラ切り後に一部ナデが見られる。内面調整は底部から体部上位までロクロナデが見られる。焼成は堅緻で、胎土は長石、石英、雲母などが含まれ、黒色鉱物を多数含むのが特徴的である。以上の特徴から、時期は8世紀後半といえる。

## 2 須恵器生産地

次に、この須恵器がどこで焼かれたものなのか探るため、周辺の窯について見ていきたい。丹波国内で発見されている窯跡群は、おおきく7か所あり、そのうち波々伯部神社から近い窯跡群として、丹波市の鴨庄窯跡群、南丹市の丹波院内窯跡群と園部窯跡群、亀岡市の篠窯跡群がある（図3）。

鴨庄窯跡群、園部窯跡群、篠窯跡群は7世紀からみられ、8世紀に最盛期を迎え、篠窯跡群のみ、9世紀以後も機能していく。丹波院内窯跡群は詳細不明であるが、時期はおおよそ8世紀に比定できる（表1）。

今回表採した須恵器と前述した窯から出土した須恵器と比較し、須恵器の産地を推定したい。産地同定の手がかりとして、有効なのは、胎土の比較である。波々伯部神社内で表採された須恵器には黒色鉱物がやや多く含まれており、その胎土の特徴をもとに周辺の窯跡から出土した須恵器と比較したい。もちろん、肉眼観察での産地同定には慎重にならねばならないが、一度丹波国内の須恵器の胎土について概観してみたい。

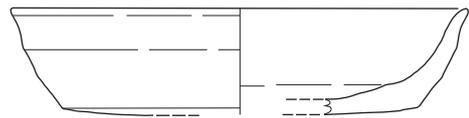


図1 波々伯部神社内で表採した須恵器  
(S= 1/2)



写真1 図1の写真

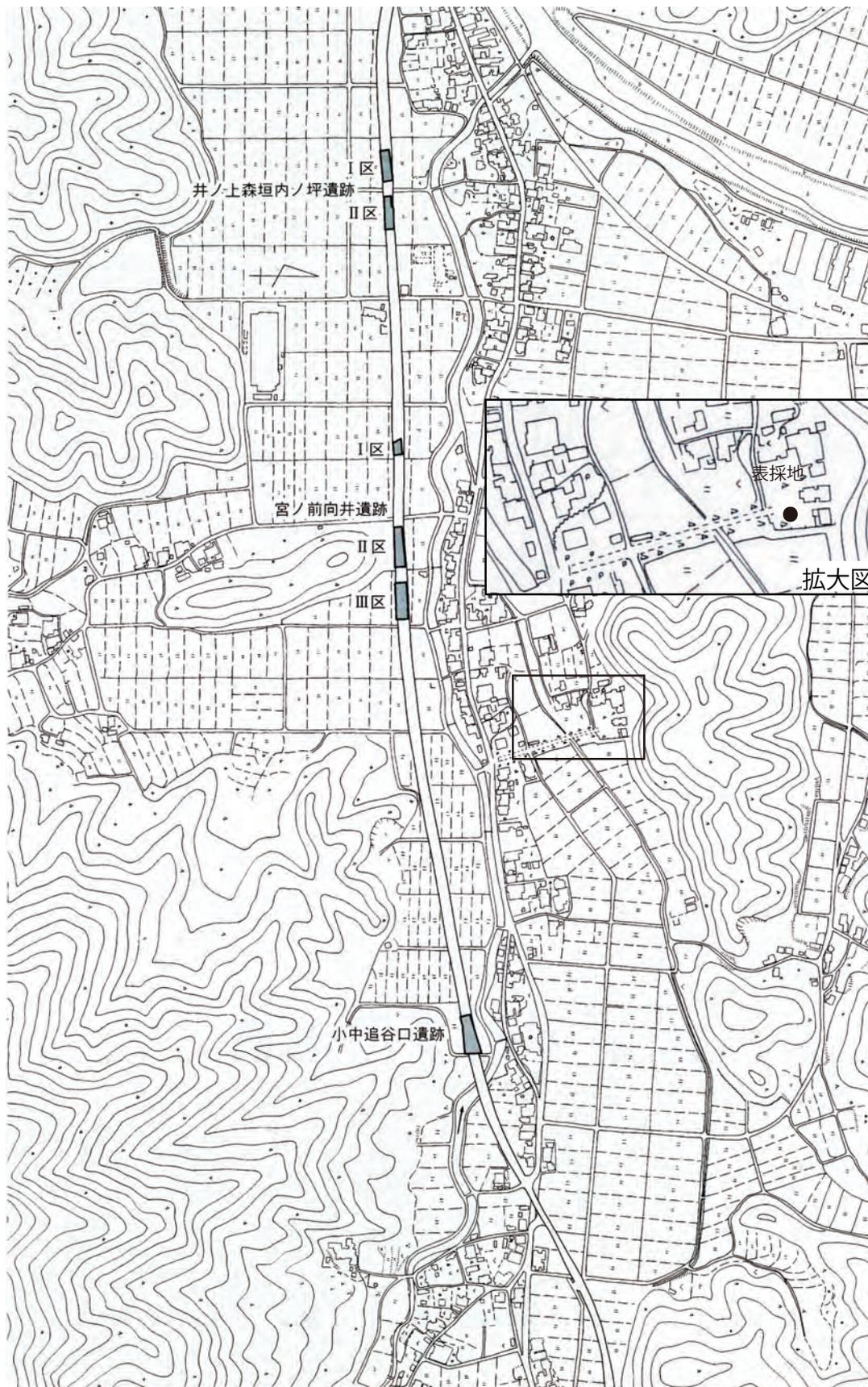


図1 須恵器表採地と周辺発掘状況 (1:8000) (兵庫県立考古博物館 2010 を一部加筆)



図3 丹波国内の窯跡 (野島 2012 より引用)

表1 丹波国内における窯跡の消長 (野島 2012 より引用)

		5世紀	6世紀	7世紀	8世紀	9世紀	10世紀
水上	鴨庄			■	■	■	
	夜久野			■	■	■	
天田	賀茂野		■	■			
	西原			■	■	■	
多紀	高倉石住	■	■	■	■		
	園部	■	■	■	■	■	
船井	丹波院内				■	■	
	周山			■	■		
桑田	篠			■	■	■	■



写真2 須恵器の拡大写真（左：波々伯部神社内表採 右上：園部窯跡群出土 右下：鴨庄窯跡群出土）



図4 篠山盆地内の窯跡（1/20000 から70%縮小）

ただ、丹波国内にみられるすべての窯跡が須恵器の様相まで分かっているということではなく、窯跡の存在は確認できるが、出土した須恵器の詳細が不明な窯跡も存在する。そのため、今回は須恵器の様相が明らかな園部窯跡群と鴨庄窯跡群の資料と比較をおこないたい。

表採した須恵器と園部窯跡群・鴨庄窯跡群の資料を比較したものは写真2である。波々伯部神社内で表採した須恵器と同じく、黒色鉱物が多数見られる須恵器は鴨庄窯跡群から出土した須恵器に多数見られる。園部窯跡から出土した須恵器からは、さほど黒色鉱物はみられない。今後、報告書作成に向けて、窯跡群の資料調査をおこない、黒色鉱物を含む須恵器の個数など詳細な数値などを明らかにしたい。

また、篠山盆地内で発掘調査はされていないが、窯跡が数基みついている（図4）。黒目谷遺跡から奈良時代の窯跡がみついている。しかし、遺構や土器の詳細などは不明である。

味間北窯跡では山裾に南向きの登窯が2基みついている。窯の傾斜は約35°とされ

ている（亥野1988）。それぞれの窯跡間の距離は約6m離れており、東寄りの窯をA窯、西寄りのものをB窯と表記し、それぞれの窯について述べたい。

A窯は燃焼部の幅1.2m、天井高0.75m、床面の厚さ10cm程である。B窯は燃焼部の幅1.6m、天井高1.1mである。両者とも、焼成部は窯の上位にある山道により削平を受けている。そのため、窯全体の様相は不明だが、山道をさらに山腹へ超えたところに、焼土と思われる赤褐色土の土がみられ、もしそれが窯の一部であるならば、全長5mほどだと思われる。

窯跡周辺（窯から約12.3m四方内）から検出された遺物は数点あり、時期は須恵器の特徴から、6世紀末～9世紀初頭と考えられている。

以上、篠山盆地内から6～9世紀の間、須恵器を焼いていた窯跡が発見されている。しかし、これらの窯跡から表採された土器の写真が報告書内ではみられず、そのうえ、これらの遺物の所在が現在不明なため、胎土比較がおこなえなかった。そのため、波々伯部神社内で表採した須恵器が篠山盆地で焼かれ

たものなのかは不明である。

今後、篠山盆地内で古代の須恵器を研究をおこなう際には、丹波国内の窯跡の動向だけでなく、篠山盆地内にみられる窯跡も注目しなければならないだろう。

### 3 古代の波々伯部神社周辺

表採した波々伯部神社周辺地域の古代の様相は、近年までまったく不明であったが、国道 372 号線のバイパス建設にともなって発掘調査が進み、その様相が少しずつ明らかになっている（図 2）。

井ノ上森垣内ノ坪遺跡では 7 世紀と 12～13 世紀代の建物群がみつかり、古代集落の一端が明らかになっている。ほかに宮ノ前向井遺跡では、時期の不明な溝や土坑が見つかり、また、国道 372 号線下には一部重なるように、古代山陰道の存在が想定されている。

今回、波々伯部神社内で表採された須恵器

により、これまで発掘調査で明らかになった古代の遺跡が発掘調査地よりもさらに北側に伸びる可能性がある。そして、これを機会にこれまでの発掘調査地より北側の発掘調査が進み、集落だけでなく官道などを含めた古代全体の様相が、明らかになれば幸いである。

#### 【参考文献】

- 亥野 彊（1988）「丹波篠山盆地の古窯跡と須恵器 一小多田・味間北地区を中心として」『八代学院大学紀要』第 32・33 号、八代学院大学学術研究会
- 野島智実（2012）「7～8 世紀の丹波の窯業生産と篠窯」大阪大学考古学研究室篠窯調査団『篠窯跡群大谷 3 号窯の研究』真陽社
- 菱田哲郎（2007）『古代日本 国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 兵庫県立考古博物館（2010）『井ノ上森垣内ノ坪遺跡・宮ノ前向井 遺跡・小中追谷口遺跡』兵庫県教育委員会